

志賀重昂・三宅雪嶺の日本論・中国論

藤田昌志

有关志賀重昂・三宅雪嶺の日本論・中国論

《提纲》

政教社は创刊《日本人》时组成的一个同人组织，这是志賀重昂，井上圆了、三宅雪嶺等人作为发起人连名创建的组织。政教社の起因是对 1884 年到 1887 年盛行的欧化主义—就是鹿鸣馆时代—的倾向的抗拒。在这篇论文中，我提出政教社的人们，特别是志賀重昂、三宅雪嶺等人，想考察他们的日本論・中国論。他们对中国有着怎样的想法，展开怎样的论述，这个考察有着深远的意义。我想通过这一考察更好地理解近代日本の日本論・中国論。

一、序

政教社は『日本人』の創刊を期して 1888（明治 21）年に結成された同人組織であり、結成当初は志賀重昂・井上円了・三宅雪嶺といった人達がメンバーとして名を連ねている。政教社結成の直接的契機は 1884（明治 17）年から 1887（明治 20）年にかけて最も盛んであった欧化主義的風潮、いわゆる鹿鳴館時代への反発であった。

本稿では政教社系の人々、とりわけ志賀重昂・三宅雪嶺・内藤湖南を取り上げ、その日本論・中国論について考察してみたいと思う。この三人が日本論をどのように展開したかについて考察するのは、相対的にはオリジナリティーのあることではないが、中国に対してどのような考えを持ち、どのような論を展開していたかを考察することには大きな意味があると考え。なぜなら、現在においても日本人の中国（国民）に対する意識、態度には三人の個々の中国論に似かよったものがあるからである。過去の三人の日本論・中国論を通して得た光を未来に投げかけたい。まず、政教社の結成された時代背景やその特徴について考察することから始めることにする。

二、政教社について

1868（明治元）年の明治維新以来、明治政府は積極的に欧化政策を推進し、又、岩倉使節団（1871（明治 4）年—1873（明治 6）年）の派遣によって欧州の実情視察等を行った。「国家」「国権」の確立は明治時代を貫く時代の気風とも言える日本の目標であったが、国権確立の指向は民衆の自由を抑圧することと等価であることも多く、自由民権運動はそう

した民衆の自由を抑圧、弾圧する「国家」に対して激しく抵抗した好例である。1880 (明治13)年3月、日本全国8万7千余人を代表した愛国社第4回大会によって自由民権運動は最高潮に達したが、このとき、政府は集会条例を出して、集会・結社・言論の自由を奪い、全国的な政治活動を非合法に追いこんだ。⁽¹⁾

自由民権運動はやがて1884 (明治17)年、1885 (明治18)年を境に急速に後退していく。⁽²⁾ 政府のあいつぐ弾圧と分裂策が効を奏したのである。これ以後、相対的な安定期に入った明治政府は制度の整備を行い、天皇制は完成へと向かう。政府部内の文教政策も修正され、伊藤博文らを中心とする指導者によって「開明的な色彩⁽³⁾」が復活した。もっともこの「開明」性は表面的な欧化主義のイメージとは異なり、新文部大臣に就任した欧化主義の学者である森有礼の施策—「学校令」を公布して(1886 (明治19)年)、小学校から大学校まで、天皇主義・国家主義によって体系的に貫く日本式「近代」学校制度を整備したことや「国家・法令ヲ軽侮スルノ意ヲ起サシムルヘキ恐アル書」を永久に排除する歴史的な検定制度を確立したこと等によって、天皇制を国民教育の上でも優勢の地位に立たせることを意味していた。⁽⁴⁾

イギリス人コンドルの設計になるレンガ造り二階建ての洋館である鹿鳴館では、外国貴賓の接待と上流社会の社交場として舞踏会等が催されていたが1884 (明治17)年の11月3日には、より大規模な舞踏会が開催された。井上馨が条約改正交渉にあたり、企てた欧化主義の最先端をいく鹿鳴館のパーティは、この年から1887 (明治20)年の井上辞職まで行われ、いわゆる「鹿鳴館時代」を現出した。⁽⁵⁾

政教社は上記のような時代背景の中で設立された。政教社設立の直接的契機は鹿鳴館時代という欧化主義的風潮への反発であったが、同時に、森有礼文部大臣による大学への干渉的姿勢に対する反発もその契機となったと言える。⁽⁶⁾

政教社設立の直接的契機としての欧化主義的風潮への反発とは、より具体的には三宅雪嶺が次のように述べることを指している。「一面は鹿鳴館に高官が戯れ、醜声の外に漏れたのに刺激され、一面は政府が保安条例を執行し、枯尾花に驚く狼狽さ加減に動かされ、余りだらしくなくて仕方なく、何とかせねばならぬ」⁽⁷⁾として立ち上がった。現実の「政府の外柔内硬^{マツ}に反抗し、外政内政共に国家自らの立場を考へねばならぬと言ふに思ひ及んだ」⁽⁸⁾からとしている。「政治上における動機が政教社結成の第一の理由」であった⁽⁹⁾とする論が成立するゆえんである。

政教社設立の第二の契機、理由として森有礼文部大臣による大学への干渉的姿勢に対する反発が挙げられるが、政教社同人は「森文相による国家主義教育政策と伊藤首相によって強力に進められている欧化政策をワンセットとして据えていたと言ってよ」⁽¹⁰⁾く、その

“決起”は「是れ大学の極小部分なりしと雖も、新たに社会に顔出し、伊藤的勢力に対抗せしもの」⁽¹¹⁾ という意味を持つものであった。

政教社について「同時代の書生社会の頂点に立って」た組織であるとの指摘がある。⁽¹²⁾ ここに言う「書生」とは「中等学校以上に在籍するかあるいはそれらに入学するための受験勉強をしている者たち」⁽¹³⁾ のことを指し、明治 20 年当時、東京の書生だけで 6 万人を数えたと言う。⁽¹⁴⁾ 中野目（1993）は書生社会の始期を明治 12、3 年頃、終期を明治 27、8 年の日清戦争期とする。⁽¹⁵⁾ 書生に先行する貢進生（明治 3 年に各藩から東大の前進の大学南校に「貢進」された俊英達）の中には杉浦重剛や宮崎道正といった政教社設立と深い関係のあった者がおり、貢進生の「弊衣破帽」の蛮カラ風は東京大学や第一高等（中）学校の学生に引き継がれたが、それ以外に強烈な政治志向の“伝統”があり、それが書生社会に継承されたと中野目（1993）は指摘する。⁽¹⁶⁾ 政教社に集まる者達は、そうした書生社会に身を置いていたのであった。

1880（明治 20）年前後の時期は華族令の発布（1884（明治 17）年）、内閣制度の発足（1885（明治 18）年）、大日本帝国憲法の発布（1889（明治 22）年）、国会開設（1890（明治 23）年）といった国家体制の整備と社会の階級化、序例化が推進された時期であり、森有礼文部大臣による諸学校令の制定によって学校、試験の制度化が進み、同時に官吏任用制度の整備が行われた。そうした社会での成功とは国家体制内で官吏任用制度に合格し、官吏になることであり、それが書生社会の目指すべき常道となった。

しかし、政教社を結成した者達は「明治 21 年の初頭までに、公職を擲って雑誌の創刊に踏み切った。」⁽¹⁷⁾ 政教社は「社会の制度化に対する比較的早い逸脱の例」⁽¹⁸⁾ と言えよう。書生社会はやがて日清戦争前後には書生の間で娘義太夫が異常に流行するなどして、風俗面が社会問題化して、崩壊していくのであるが、それはかつての政治熱が冷めて分解に向かったと言えるのかもしれない。⁽¹⁹⁾

政教社は「国粹保存」主義を標榜したが、それは次のような点で特に注目されると識者は言う。⁽²⁰⁾ 第一に政教社の「国粹」という観念は、後年の狂心的国粹主義のように「天皇統治の大義」とか天皇の「神聖」性や「万世一系」性といった政治的イデオロギーとしての性格を濃厚にしたものと異なり、「日本という国土に住む民族の長い歴史を通して刻まれた生命の年輪とでも言うべき包括的な－したがって単に政治的のみならず同時に地理的・経済的・文化的な－観念」⁽²¹⁾ であった。政教社の政治的イデオロギー性の希薄性については政教社設立時の「同志」11 名のうち 4 名（＝三宅雄二郎、井上円了、棚橋一郎、辰巳小次郎）が東京大学文学部の非政治的な哲学・文学を専攻していることと深い関係があり（当時の東京大学文学部は政治学、理財学を専攻する者が 80% 近くに達し、卒業後の進路を見

ると法学部以上に現実政治に密着した学部であった⁽²²⁾、又、「どちらかと言えば生態的・文化的な色調を帯びたもの」として「国粹」観念は語られ、それは「神道者流の非合理的・神秘的な思考態度からは明確に一線を描する」⁽²³⁾ 性質のものであった。

「国粹」の形成は以下の引用のように生物進化の過程になぞらえて理解されている。⁽²⁴⁾

蓋し這般の所謂国粹なる者は、日本国土に存在する万般なる圀外物の感化と化学的反應とに適應順從し、以て胚胎し生産し成長し發達したるものにして、且つや大和民族の間に千古万古より遺伝し來り化醇し來り、終に当代に到るまで保存しけるものにしあれば、是れが發育成長を愈よ促致奨励し、以て大和民族が現在未來の間に進化改良するの標準となし基本となすは、正しく是れ生物学の大源則に順適するものなり

志賀重昂『日本人が懷抱する處の旨義を告白す』⁽²⁵⁾

政教社の特徴として第二に注目されるのは、その国粹主義が志向として「民族の独善的、閉鎖的な自己主張に陥ることなく、むしろ世界に向って開かれた健康なナショナリズムとしての性格を具えていたという点」⁽²⁶⁾ である。三宅雪嶺においてはそれぞれの民族がそれぞれの特性と能力を十分に發揮することによって、はじめて人類文化の發展に寄与しようと考へられており、自国や自民族の独自性の主張は他国の利益や他民族の独自性を否定したり、排除したりするものとは考へられていなかった。西洋文明については安易な模倣を批判したが、政教社が問題としたのは「西欧文明を取り入れるか否かではなく、じつはその取り入れ方であった」⁽²⁷⁾ と言える。

政教社「同志」のうちで本稿では志賀重昂、三宅雪嶺の二人を取り上げるが、二人のアジア、中国への視点、中国論は異なる。印象的に述べるならば志賀重昂の場合は、世界をピラミッド構造で見、一番上に欧米、次に日本、最後にそれ以外の世界の国々を置いた感がある。三宅雪嶺については「宇宙」や「東西世界」について深遠な思索を展開していった感がある。

日清戦争以前の政教社の対外論を概観すると、日本を基点として四方に向かう四つの「論」が組み立てられていたと言える。⁽²⁸⁾ その第一は、北海道移住論や千島義会の企てに代表される方向で、第二はハワイを中継地にした南北アメリカ大陸各地への移民論、第三は南進論で、湾からフィリピン、南洋諸島からオーストラリアへ日本の勢力を伸ばしていかうとするもの、第四は朝鮮半島を通して中国東北部(満州)へ向かう北進論であった。⁽²⁹⁾ やがて「東方問題」の顕在化は「アジア」重視を余儀なくされることとなったが、『日本人』が1891(明治24)年春に長期にわたる発行停止処分を受け、同年6月に新たに創刊された

『亜細亜』では「東洋盟主論」が主たるものとなっていった。

日清戦争後の日本の思想界では西洋文明の一層の肯定、普遍化を企図する「世界主義」と東洋文明の覇者としての日本の独自性を強調する「国家主義」が内面で葛藤をくり返すことになったのではないか⁽³⁰⁾との言辞があるが、本稿で取り上げる二人は時代の中でどのように日本論、中国論を展開したのであろうか。以下、その考察に移りたいと思う。

三. 志賀重昂の日本論・中国論

志賀重昂は1863(文久3)年、三河国岡崎に岡崎藩の藩校儒者志賀重職(控堂)・淑子の長男として生まれた。⁽³¹⁾1878(明治11)年、東京大学予備門入学試験に合格の後、1880(明治13)年、札幌農学校に入学。在学中は、学業よりは北海道の人跡未到の秘境探険に熱中し、後年の地理学研究の素地を養った。1884(明治17)年札幌農学校を卒業(農学士)。後、長野県立中学校教諭、丸善書店勤務を経て1886(明治19)年2月「筑波」に便乗して南洋巡航の途に上り、カロリン諸島東端のクサイ島、オーストラリア、ニュージーランド、フィジー諸島、サモア諸島、ハワイ等を巡り、植民地をめぐる列強の争奪戦の状況をつぶさに目撃し、世界認識を新たに同年11月に帰国。1887(明治20)年、前年の南洋巡航の見聞を警世の意を込めて『南洋時事』として出版する。1888(明治21)年、杉浦重剛の東京英語学校で地理学の教鞭を執るかたわら、家塾を営む。4月3日、杉浦重剛、宮崎道正、三宅雪嶺、井上円了等と政教社を設立し『日本人』を発刊する。『日本人』の編集人、事実上の主筆となり、国粹主義の旗手として論陣を張る。1891(明治24)年『日本人』の相次ぐ発行停止により『亜細亜』を創刊し、編集人となる。1894(明治27)年8月1日、日清戦争開始。10月『日本風景論』(政教社)を出版(1903年までに増訂15版を重ね、明治期有数のロングセラーとなり好評を博す)。1895(明治28)年東京専門学校(1902年9月、早稲田大学と改称)講師となり、地理学を担当する。1902(明治35)年、第7回総選挙で岡崎より衆議院議員に初当選(政友会)。1903(明治36)年第8回総選挙で再当選。1904(明治37)年、2月日露戦争開始。第9回総選挙で落選。以後、政党活動、実際政治から離れ、啓蒙的地理学者、世界旅行家としての面を強くする。1905(明治38)年~1910(明治43)年の間、韓国に赴き皇帝への拝謁やアルゼンチン、英、仏、独、伊、スイス、エジプト、マライ半島等の世界旅行を行う。1911(明治44)年、早稲田大学教授となる。又、『世界山水図説』(富山房)出版。1912(明治45・大正元)年~1923(大正12)年カリフォルニア・ハワイ諸島、満蒙地方、南アメリカ、インド、ペルシア、欧州、北米、中東等を歴訪する。1927(明治33)年、左膝関節炎に糖尿病を併発し、早稲田大学教授在職のまま死去。享年64才。

以上のような経歴を持つ志賀重昂の日本論は主として、その国粹主義と地理学で展開されている。

志賀重昂の国粹主義の「国粹」が何を意味するのかは『日本人』第二号(1888年4月18日)の「『日本人』が懐抱する処の旨義を告白す」(志賀)で(既引用のように)次のように述べられている。「蓋し這般の所謂国粹なる者は、日本国土に存在する万般なる圉外物の感化と、化学的反應とに適應順從し、以て胚胎し生産し成長し發達したるものにして、且つや大和民族の間に千古万古より遺伝し來り化醇し來り、終に当代に到るまで保存しけるものにしあれば、是れが發育成長を愈よ保致奨励し、以て大和民族が現在未來の間に進化改良する標準となし基本となすは、正しく是れ生物学の大源則に順適するものなり」。

「国粹」の形成を生物進化の過程になぞらえて理解しているのが(既述)、志賀がスペンサー、ダーウィン、カーライル、バックルなどの著作に親しんでいたことは回想等から知ることができ、それらの影響とともに、北海道、そして南洋での経験が重なって「国粹主義」の理論化へ向かった⁽³²⁾と考えられる。

志賀の国粹主義は又、「西洋の開化」を日本に「輸入」する際の一種のフィルター⁽³³⁾でもあった。志賀は言う。

独り「国粹保存」の大旨義は即ち西洋の開化を日本に輸入するも之をして大権を操らしめず、日本の開化を主とし西洋の開化を客となす者にして、語を易へて謂へば西洋の開化を輸入するも之をして日本的に同化せしむるものなれば、這般が独り至理至義のみならず、亦至利至益なるは予輩が曩に曉々叙述する処の如けんか。⁽³⁴⁾

志賀は更に「国粹」について「国粹とは大和民族が固有特立の精神と、其最長所たる美術的の觀念を唱導するものなり」⁽³⁵⁾とも述べている。この志賀が「国粹」を「美術的觀念を唱導するもの」とすることについては、「日本のナショナリティーの特質を日本人のもつ審美的精神のなかに見出そうとする態度にも、志賀の非政治的(美的・文化的)な価値を指向する姿勢が如実に示されていると言うことができる」⁽³⁶⁾とする考えと「相対的に言えば、この時期の志賀にとって「国粹主義」の理論化を構想する上で大きな意味を有するものではなく、むしろ今後の方向性として意識されはじめたものといえる」⁽³⁷⁾とする考えがある。

既途のように、研究者の間では政教社の「国粹」についての把握の仕方は非政治的なものにとらえようとするものが多い。たとえば政教社について第一に「政治上における動機」で結成されたとすることには異論はないであろうが、政教社の「国粹」については「政治的のみならず同時に地理的・経済的・文化的な——觀念」とし、政教社の政治的イデオロ

ギーの稀薄性について説明する。ある意味では、国粹主義者に対する誤解——後年の狂心の国粹主義と同一にみなされるという誤解——をなくすためもあっての非政治性の強調なのであろうが、そうした非政治性に価値を置くこと自体に日本のエトスを見てとるのは私一人であらうか。(少なくとも中国では非政治性に価値を置くことは公的にはないであらう。)

志賀の国粹主義は「西洋の開化」を日本に輸入する際の一種のフィルターであり、生物進化の過程になぞらえた「国粹」についての理解が存在する。志賀にとっての日本とは、この「国粹」あっての日本であったと言える。そして「日本国土に存在する万般なる困外物の感化と、化学的反應とに適応順従し、以て胚胎し生産し、成長し発達したるもの」がその「国粹」なのであるから、そこに地理学との密接な関係が生じるのは必然的帰結であった。

志賀の地理学の著作は国粹主義の思想を喚起することに全力を傾けた⁽³⁸⁾ものであった。とりわけ1894年10月の日清戦争の最中^{さなか}に出版された『日本風景論』は志賀の地理学の代表作である。次に『日本風景論』を通して、その地理学の特徴とそこで展開される日本論、中国論について考察してみたいと思う。

志賀は『日本風景論』で日本風景の瀟洒^{しょうしやう}、美^{てつとう}、跌宕について述べ、それを生んだ四つの因、つまり一、日本には気候、海流の多変多様なる事二、日本には水蒸気の多量なる事三、日本には火山岩の多々なる事四、日本には流水の浸蝕^{しんじやく}激烈なる事⁽³⁹⁾について説明し、これらによって生じた日本の風景を世界に誇り得るものとし、「この自然風土を列国帝国主義に対抗するための国民精神統一の拠り所とした」⁽⁴⁰⁾。志賀は「風景とナショナリズムとの結合をはかり、「国土認識、日本国土の洵美さという美的な空間の価値を再発見し、これを国民が共有する喜びこそ国粹思想涵養の一大手段であると考えた」⁽⁴¹⁾」のであった。

こうした志賀の地理学の著作の前提には環境決定論の考えが存在するのは論をまたない。「江山洵美是我郷」という『日本風景論』の書きだしの句は大概磐溪の「江山信美是吾州」の「信」を「洵」に変えることによって「洵美」となり、それは「醇美」や「純美」の連想をさそい出し、「新奇さ」を持つに致る。又、「州」を「郷」に変えることによって「吾郷」は「州」の下位概念としての「郷」から「故郷」、「心理的な、精神的でさえある一種普遍的ともいふべき広袤性^{ほう}を獲得した」⁽⁴²⁾「故郷」「郷土」になるのであった。『日本風景論』は日本風景を国粹主義^{まなこ}の眼で「再発見」した書であると言ってよいであらう。

しかし、「吾郷」が世界中どこの国の人間にとっても「洵美」であるという「普遍性」を志賀は「特殊化」してしまう。「吾郷」の「広袤性^{きやうあい}を狭隘化」⁽⁴³⁾してしまうのである。

然れども日本人が日本江山の洵美をいふは、何ぞ^{ただ}菅にそのわが郷にあるを以てならん

や、実に絶対上、日本江山の洵美なるものあるを以てのみ。外邦の客、皆な日本を以て
宛然^{えんぜん}現実世界における極楽土となし、低徊^{ていかい}措^おく能^{あた}はず自^{おのずか}ら
花より明るく三^み芳^{よし}野^のの春^のの曙^{あけぼの}みわたせば
もろこし人^{びと}も高麗^{こま}人も大和^{やまと}心^{ごころ}になりぬべし 頼山陽^{らいさんよう}の所^{ところ}あらしむ。想^{おも}ふ浩々^{こうこう}たる
造化^{だいこう}、その大工^{だいこう}の極^{あつ}を日本国^にに鐘^{かね}む、これ日本風景^にの渾^{こん}円^{えん}球^{きゅう}上に絶^{たつ}特^{とく}なる所^{ところ}因^ゆ、⁽⁴⁴⁾

日本人が日本江山の洵美を言うのはその「絶対」上、洵美であるからである、日本風景が地球上で「絶特」なのは造化の「その大工の極を日本国に鐘」めたからであると言うとき、「普遍性」は消失し、「特殊」性が前面に出てしまう。志賀の国粹主義が「世界に向けて開かれた健康なナショナリズム」⁽⁴⁵⁾とは言いがたいものであったことが窺い知れる。極端な特殊性を帯びた『日本風景論』が「普遍性の傾きをいっさい拒んで、強力な偏光、内村鑑三の指摘した Patriotic Bias に歪曲されっぱなしの特殊的日本風景論として現れたのはその当然の帰結」⁽⁴⁶⁾であったと言える。

志賀が国粹保存主義の主張をはじめたとき、現実の日本は欧米列強と比較すれば「無力でちっぽけな日本」⁽⁴⁷⁾であった。日本を欧米列強の殖民政策から護り、軽薄な欧化主義を否定するために、江山洵美な吾が郷、それも世界に冠たる日本風景を称揚しなければならなかった⁽⁴⁸⁾のである。時あたかも日清戦争の最中であったことから『日本風景論』は爆発的に売れた。

そうした志賀が中国に対してどのような論を展開していたかは自明であろう。たとえば『日本風景論』一、所論(二)美の「日本の春」⁽⁴⁹⁾で「漢土無桜。又無鶯。非無桜也。無我桜也。鶯亦然。彼之有鶯。其形大。其色殊。其声不若我鶯之美也。(漢土には桜無く、又鶯無し。桜無きに非ざるなり、我が桜無きなり。鶯もまた然り。彼の鶯有るはその形は大にして、その色は殊なり、その声は我が鶯の美しきに若かざるなり。)」⁽⁵⁰⁾と述べるのは日本と中国の桜、鶯を比較して優劣をつける、それもまず日本の方が優れているという前提からの比較であるから、そこに存在するのはピラミッド構造で世界を見るまなざしでしかない。

「支那の如き」、北方は「黄塵粉々、戸障に入り、木葉を蔽ひ、田園に累り、泉水また黄濁、殺風景の極を尽く」し、南方は「十中の七、八は、太古紀、中古紀の岩石に成り、森林は幾千年来濫伐し去りて巨大高樹の幽邃少なく」、「固より火山岩国たる日本の景象たる処警拔秀俊なるに似ず」⁽⁵¹⁾と言う志賀にとって中国は少なくともピラミッド構造の頂点又は上層に位置する国ではなかったであろう。それどころか後年次のように日本の人口処分のための原料地としてアジア大陸をとらえる考えには、日本の帝国主義の進路とともに中国(等アジア)への志賀の考えが語られているのである。

昨今、『国土狭小、人口激増、而して排日の声は四周に起れり、如何にして愈々益々増加する人口を処分すべきや』と言ふ念が一たび浮び来ると、夜は眠られぬことがある、すると預ての所信の（一）『亜細亞^{マダ}太陸を原料地となし、日本内地を加工地となし、隣近の東洋南洋地方を販路とする三角法』と（二）『海洋の開拓』との二方策にて人口の処分が着くではないか、⁽⁵²⁾

志賀に存在するのは欧米列強の帝国主義にならった優等生日本の弱肉強食のまなざしでしかない。

四、三宅雪嶺の日本論・中国論

三宅雪嶺は1860（万延元）年5月19日に加賀国金沢新堅町に儒医である父、恒と母、滝井の第四子として生まれた。⁽⁵³⁾ 1875（明治8）年名古屋の官立愛知英語学校に入学。1876（明治9）年東京開成学校予科に入学し寄宿舎に入る。1877（明治10）年予科は東京大学への改称によって東京大学予備門となる。1879（明治12）年東京大学文学部に進み哲学を専攻。フェノロサ等の影響を受け、スペンサー、ヘーゲル、カーライル等の著作に親しむ。1883（明治16）年東京大学文学部哲学科卒業。東京大学御用掛と同時に文学部准助教兼編集方となり日本仏教史の編集に従事する。1886（明治19）年文部省編輯局に移りチェンバレンの下で日本文典編纂の助手を務める。1887（明治20）年役所仕事に腹を立て文部省編輯局を辞職。1888（明治21）年志賀重昂等と政教社を設立し、『日本人』を創刊、国粹主義を主張する。1889（明治22）年『哲学涓滴』を出版。1891（明治24）年『真善美日本人』『偽悪醜日本人』を出版。1892（明治25）年『我觀小景』を出版。1894（明治27）年8月1日日清戦争勃発。この戦争を強く支持する。1904（明治37）年2月10日日露戦争勃発。この戦争を強く支持する。1909（明治42）年『宇宙』を出版。1911（明治44）年幸徳秋水『基督抹殺論』に「序」を寄稿するも不掲載となる。1月24日幸徳秋水等「大逆事件」被告11名死刑執行。1913（大正2）年長女多美、朝日新聞記者中野正剛と結婚。1915（大正4）年「東洋教政対西洋教政」連載開始（1919年12月完結）。1926（大正15・昭和元）年「同時代觀」の連載を開始（1945年12月まで）。1937（昭和12）年林銑十郎内閣組閣に際して文部大臣への就任要請があったが辞退。1943（昭和18）年4月29日文化勲章を授与される。7月18日妻、花圃死去。10月26日、女婿中野正剛、東條内閣を批判して自刃。1945（昭和20）年11月26日早朝死去。

以上のような三宅雪嶺の経歴を見て、まず問題としたいのは三宅雪嶺の国粹主義は他の国粹主義、例えば既述の志賀重昂の国粹主義とどのような相違があるのかと言うことであ

る。鹿鳴館時代への反発から政教社を結成したのが政教社同人の共通点であることは論をまたないが、三宅雪嶺の国粹主義や日本論には志賀のように世界をピラミッド構造でとらえ、その頂点に位置しようというエトスは感じられない。(勿論、それが「無害無毒の教訓」⁽⁵⁴⁾を産出することにもなるのであるが。)

三宅の国粹主義の特徴は1891(明治24)年の『真善美日本人』の凡例で次のように明確に述べられている。「自国のために力を尽くすは世界のために力を尽くすなり。民種の特徴を發揚するは人類の化育を裨補するなり。護国と博愛となんぞ撞着することあらん。」⁽⁵⁵⁾三宅には対立、鬭争よりは、相互補完性、調和をめざすところがある。たとえば1889(明治22)年の『哲学涓滴』は西洋近世哲学史の大要を伝えた著述⁽⁵⁶⁾であるが、「東洋といひ西洋といへば、優劣自ら判然たるが如ごとくなれどもマルコ・ポロの元の世祖に仕へし時は、恐おそくは東洋を以て西洋に超越すと為せしならん。」「有名なる希臘の繁華、稱するに足らざるに非ずと雖も、其れ能く周の郁々乎たる文化に若かんや。印度亦た時ありて世界に冠絶せしならん。」と述べ、ヨーロッパの優越が先験的で絶対的であるとの認識をうちやぶろうとしている。⁽⁵⁷⁾又、哲学についても「東洋にて最も重要な儒道仏の三教にして、西洋各派の学理に拮抗するに不足なしとす」とし、東洋哲学を西洋哲学あと相並ぶものと考えている。三宅は常に「東西兩哲学(ないし兩文明)の総合と調和をめざしてい」⁽⁵⁸⁾た。両者が相補って世界の文明を進展させるべきだというのが三宅の思想の根柢であって、またその特色をもなしていた。⁽⁵⁹⁾

『我観小景』(1892(明治25)年)では常に特殊と普遍の関係、両者の相互補完性の追求にその思考が向けられ、普遍と永生という宇宙にたち向かう我=哲学する自分という図式が全篇つうじてのたうっている。⁽⁶⁰⁾

大著『宇宙』(1909(明治42)年)では宇宙を生物視する三宅の立場が表明されており、原生界(大宇宙)、副生界(大宇宙の一部としての地球や地球上の生物)をすべて「渾一」のうちに統合しようとしているが、宇宙へのその執心は「西洋的なものを止揚しなにか普遍的なものを發見したいという意志にもとづいていた」⁽⁶¹⁾と言える。

三宅雪嶺は代表的著作『真善美日本人』で、個別性の發揚を通じての普遍性の獲得=世界への寄与へという道⁽⁶²⁾を述べ、真・善・美それぞれの分野での日本の世界への寄与、貢獻の道について具体的に説いている。「真」=學術の分野では、「欧州留学のこと、これを排斥するはもとより過当なりといえども、均しくこれ国帑を消糜せんには、むしろ東洋の新事理を探求して全世界の真を極むるの歩趨を策進するの当たれるに若かんや。要するに日本人が東洋の新材料しに藉りて、未発のの新理義を發揮するは、一日の紓ぶべからざるの急務なり」⁽⁶³⁾とし、より具体的には、中国について「その文字のごとき、仮用千有余年、こ

れをわが国字とし視るも不可なきほど」であり、江戸時代の文化は全く漢字流で「支那の書を解し、支那の辞章をなすこと、ほとんどその土着の人に下らず、そのまったく支那文明の趣味を了得して、これを全世界に伝うること、きわめてなしやすきことなり。邦人にしていやしくもまず支那より始め」、その「傍近諸邦」に及んで東洋政治史、東洋工芸史、東洋哲学史、東洋文学史、風俗誌などを「斬新なる筆鋒をもってこれを叙述しこれを描写しこれを批判して討究せば」、世界における勲業は真を極むるの道において大なるものがある、「思想精微、悟性明敏なる日本人、何ぞその力をこれに及ぼさざる」⁽⁶⁴⁾と述べている。ここには三宅雪嶺の日本から東洋、世界への貢献、寄与の一つサンプル、夢が述べられている。それは世界を序列で見て、下の者を見下し、支配しようとする視点ではなく、非ヨーロッパ型近代化への模索の姿勢⁽⁶⁵⁾の顕現であったと考えられる。

「真」については更に博物館、美術館の完備を希求しアジア大陸に学術探征隊を派遣することを提言している。「善」では善＝正義とし、産業・軍事面での国粋主義を、「美」＝芸術では、「軽妙は邦人が一箇の特質」とし、その特質を伸ばして、世界に発揚すべきであると説いている。『真善美日本人』(と『偽悪醜日本人』)で表されている三宅の国家観については「国家そのものを究極の目的とはしていなかったように思われる」⁽⁶⁶⁾と言う識者の言もあり、三宅雪嶺が狭隘な国家主義者ではなかったことは事実であろう。以上見た中国、東洋への学術的な指向面からもそのことは窺い知れるのである。

もっとも三宅雪嶺には、昭和になると「既にはっきりと過去の言論人と目されてはいた」⁽⁶⁷⁾という面もあり、また、太平洋戦争が始まったころから、「俄然、熱をおびて時局推進の筆をふるうようになった」⁽⁶⁸⁾点も存在し、その足跡は「たとえば『事変最中』『変革雑感』『爆裂の前』『爆裂して』『激動の中』等々当時の著書の表題にあきらかである」⁽⁶⁹⁾という事実も存在する。現在の時点から見ると「無害無毒の教訓」、当たり前の言辞と言えるものも数多い。

しかし、日清戦争後の思想界で西洋文明の肯定・普遍化を企図する「世界主義」と東洋文明の覇者としての日本の独自性を強調する「国家主義」の内面での葛藤がくり返される(既述)中で、「大は世界から小は一個人にいたるまで、人間生活のあらゆる面で、文化的、思想的な、さまざまな雑多な諸要素の雑居性を肯定し、これらの諸要素が相互に働き合って、おのずからより高い価値をつくりだす調和的機能への期待」⁽⁷⁰⁾を持続しつつけた三宅雪嶺は政教社の第二の特徴としての「世界に向って開かれた健康なナショナリズム」を典型的に体現していた人であると言っても過言ではないであろう。雪嶺には日本の特殊性を単に美化する視点はなく、より普遍性を目指しての言辞が多い。政教社の本来の精神を体現した人であったと言える。

〔注〕

- (1) 色川 (S.51) p.120
- (2) 色川 (S.51) p.122
- (3) 色川 (S.51) p.123
- (4) 色川 (S.51) p.123
- (5) 川崎庸之等総監修 (1998) p.853
- (6) 佐藤 (1998) p.19
- (7) 三宅 (1924) p.40
- (8) 三宅 (1933) p.15
- (9) 佐藤 (1998) p.18
- (10) 佐藤 (1998) p.19
- (11) 三宅雪嶺 (1895) p.35
- (12) 中野目 (1993) p.28
- (13) 中野目 (1993) p.28
- (14) 中野目 (1993) p.28
- (15) 中野目 (1993) p.29
- (16) 中野目 (1993) p.30
- (17) 中野目 (1993) p.31
- (18) 中野目 (1993) p.32
- (19) 中野目 (1993) p.32 引用の伊藤整 (1954) 『日本文壇史』二講談社より。
- (20) 松本 (S.55) p.423
- (21) 松本 (S.55) p.423
- (22) 中野目 (1993) p.41
- (23) 松本 (S.55) p.424
- (24) 松本 (S.55) p.423
- (25) 著者代表 志賀 (S.55) p.99
- (26) 松本 (S.55) p.424
- (27) 松本 (S.55) p.424
- (28) 中野目 (1993) p.206
- (29) 中野目 (1993) p.206
- (30) 中野目 (1993) p.262
- (31) 志賀重昂の伝記は主として佐藤 (1998) の政教社系同人年譜・政教社系年表の志賀重昂の部分 pp.267-272 に依った。
- (32) 中野目 (1993) p.153
- (33) 中野目 (1993) p.151
- (34) 志賀重昂「日本前途の国是は「国粹保存主義」に撰定せざるべからず」(『日本人』第3号 (1883

年5月3日)

- (35) 志賀重昂「日本国裡の理想的事大党」(『日本人』第5号(1888年6月3日))
- (36) 松本(S.55) p.429
- (37) 中野目(1993) p.154
- (38) 佐藤(1998) p.123
- (39) 志賀重昂(2001) 岩波文庫 p.24 読者の便に供するため使用した。
- (40) 佐藤(1998) p.124
- (41) 佐藤(1998) p.124
- (42) 大室(2003) p.176
- (43) 大室(2003) p.179
- (44) 志賀(2001) p.14
- (45) 松本(S.55) p.424
- (46) 大室(2003) p.180
- (47) 大室(2003) p.221
- (48) 大室(2003) p.221
- (49) 志賀(2001) pp.18-22
- (50) 志賀(2001) p.18
- (51) 志賀(2001) p.87
- (52) 志賀(1921)「日本人口の処分案」(1928)『志賀重昂全集』第1巻 p.113
- (53) 三宅雪嶺の伝記は佐藤(1998)の政教社系同人年譜・政教社系年表の三宅雪嶺の部分 pp.260-266 に依った。
- (54) 鹿野(S.46) p.59
- (55) 鹿野責任編集(S.46)『真善美日本人』p.286
- (56) 鹿野(S.46) pp.44-45
- (57) 鹿野(S.46) p.45
- (58) 鹿野(S.46) p.46
- (59) 鹿野(S.46) p.46
- (60) 鹿野(S.46) p.47
- (61) 鹿野(S.46) p.48
- (62) 鹿野(S.46) p.50
- (63) 鹿野責任編集(S.46)『真善美日本人』p.305
- (64) 鹿野責任編集(S.46)『真善美日本人』p.303
- (65) 鹿野(S.46) p.64
- (66) 中野目(1993) p.164
- (67) 佐藤(1998) p.144
- (68) 鹿野(S.46) p.62
- (69) 鹿野(S.46) p.62
- (70) 本山幸彦(S.49) p.438

《参考文献・引用文献》

- (1) 色川大吉 (S.51) 『明治精神史 (下)』講談社学術文庫
- (2) 川崎庸之等総監修 (1998) 『読める年表・日本史』自由国民社
- (3) 佐藤能丸 (1998) 『明治ナショナリズムの研究 — 政教社の成立とその周辺 —』芙蓉書房出版
- (4) 三宅雪嶺 (1924) 第一次『我観』「自分の政治関係」11月号
- (5) 三宅雪嶺 (1933) 『明治思想小史』岩波書店
- (6) 三宅雪嶺 (1895) 「面棚偶語 (二)」第三次『日本人』第5号 (1895)
- (7) 中野日徹 (1993) 『政教社の研究』思文閣出版 p.28
- (8) 松本三之介 (S.55) 「解題」(著者代表志賀重昂 発行者布川角左衛門 (S.55) 『明治文学全集 37 政教社文学集』筑摩書房所収)
- (9) 著者代表志賀重昂 発行者布川角左衛門 (S.55) 『明治文学全集 37 政教社文学集』筑摩書房
- (10) 志賀重昂 (1888) 「日本前途の国是は「国粹保存旨義」に撰定せざるべからず」(『日本人』第3号 (1888年5月3日))
- (11) 志賀重昂 (1888) 「日本国裡の理想的事大党」(『日本人』第5号 (1888年6月3日))
- (12) 志賀重昂著(近藤信行校訂) (2001) 『日本風景論』岩波文庫 岩波書店
- (13) 大室幹雄 (2003) 『志賀重昂『日本風景論』精読』岩波現代文庫 岩波書店
- (14) 志賀重昂 (1921) 「日本人口の処分案」(『日本一』1921年2月号所載 (1928) 『志賀重昂全集』第1巻所収)
- (15) 鹿野政直 (S.46) 「ナショナリストたちの肖像」(責任編集鹿野政直 (S.46) 『日本の名著 37 陸羯南 三宅雪嶺』中央公論社所収)
- (16) 鹿野政直責任編集 (S.46) 『日本の名著 37 陸羯南 三宅雪嶺』中央公論社
- (17) 本山幸彦 (S.49) 「調和的人生論とその根柢 — 三宅雪嶺を中心に —」(福沢諭吉等著 (S.49) 『現代日本文学大系』筑摩書房所収)
- (18) 福沢諭吉等著 (S.49) 『現代日本文学大系』筑摩書房
- (19) 『内藤湖南全集』筑摩書房 (= 『全集』)
- (20) 三田村泰助 (S.47) 『内藤湖南』中公新書 中央公論社
- (21) 小川環樹 (1995) 「内藤湖南の学問とその生涯」(小川環樹責任編集 (1995) 『内藤湖南』(中公バックス日本の名著 41) 中央公論社所収)
- (22) 小川環樹責任編集 (1995) 『内藤湖南』中公バックス 日本の名著 41 中央公論社
- (23) 吉尾寛 (2001) 「内藤湖南の中国共和制論 — 『支那論』から『新支那論』への道すじを考えた —」(内藤湖南研究会編著 (2001) 『内藤湖南の世界 — アジア再生の思想』河合文化研究所所収)
- (24) 内藤湖南研究会編著 (2001) 『内藤湖南の世界 — アジア再生の思想』河合文化研究所
- (25) 子安宣邦 (2003) 『日本近代思想批判 一国知の成立』岩波現代文庫 岩波書店